人 12
881
17

関屋　澪漂並第二

巻名　細ハ詞名にあらされはいかにあることなるや此字ハ
助字也不可為巻名せさるやうなりとさたかにいひきたれる
とある詞よりも名付たり源氏廿八歳乃九月二十乃ころの事也花
鳥餘情に並と云ハ桜の並也　巣詞をとりて名とする
はこ故に此まきの詞に関屋よりうちいてつれ出る源氏
ひとつるとある詞をとりて名とす又或説に
あふさかの此関屋ハいかなるせきなれハ茂きなけきの中をわくらん
此歌のてにをはやいつれをとりてかくと詞をとりて名と
もいふ也さてこの古説也但其此関屋ハてにをはとる也
てすゑのよしと弄花のとの細つ此まきハ桜乃並也源
氏廿八歳乃九月ころの事なりあつ花鳥にハ源氏廿八歳
のことなりとあり澪漂巻ハ八月のすゑにもあれは此まきハ九月

石山詣乃ことをいへる故に関也との給へり如何 弄 花に
の給ハ此巻に空蝉乃事あらはしてあともいへり
又澪標巻末廿八歳十一月廿日石山詣ありて蓬生巻
みを卯月迄ありてそ也此巻ハ源氏廿八歳乃九月之記
すとも仍此巻を横乃並といふの給へり 私 澪標巻に十一
月乃比石山詣の事あり此巻ハ九月石山詣のありし蓬生
巻卯月次まて此事みゆ又末ニ二とえたるを此後乃
事とり用ひたる也此巻ハ横なる歌也花鳥ニは竪乃並
也といへり

伊予のすけといひしハ古院かくれさせ給ひて又の年ひたち
になりてくたりしかハ 細 伊予乃すけと云伊予を任して
後に常陸になる也常陸になりて下る源氏須磨へ下る時
此年のうちなりてのほらて下る也 余 中川乃宿れ

ありし空蝉乃妻のる事也帚木巻に桐壺のくれさを
語る所へ年常陸に赴て下向せる也源氏左遷乃
前の年なるへし 私同
かのきくきたるいさゝかのそれ的あると 細 空蝉也 弄 帚木巻
まくさま見しやとあつくて空蝉源氏の君にあはせたくさとひねる所
此ぬ乃たくまく也いふ所く空蝉の中に今出ありし
其後の須磨にも源氏中のて人えて此ひゆりあるある
みつも何くさ見しつかし 弄 源氏左遷れしを常陸になく
中のしる事也人えて連ぬと見中川乃宿の遠れ時密あるへ
乃るけ山よの所まてのちるれた歌のこゝろある也
法く人中の中へき心得ききくはくのわ乃山をも知れとも風
ともうき身る心ちしていさゝかれ流と人をえすて年月くき
まつ弓事り 細 のひしまを指てしみし後のさを成人のもの

やとつてやもん乃ことにて人あるも甲斐なきを常陸のと
なれとはくゝみに見ゆるも此ことにそ移らしむしと
ふそのくされ山をとゝるしはしんと云ふもされた見へて
なる面白しともことつくるもやすくなりへともふかなるや
うたなる事よりあるは方へうて聊尓（レウジ）なるよしと思ふて中らく
末摘もやゝさくるもしともや　弁　人なるもくれやうとつてやう
んの心ふかくことのほいとも乃かなるやうに及へらすくてと
やくひかるとを引わきたり　栄うきさかなるんちやとは門ある
引風よ言絶座しんとのんまれたうかなる所らし
てなさるや
かされるもとも為るるもし法橋升なれと　細　源の須さへ
たつ時しも今年を三十年やあるもちよくなるとし
は此前の年もされた一位四十年まての方るらし館の本

なり　栄　源氏の左遷はされと須磨にゆくのことは須へいはぬ
ともに年月をいはしぬ播磨のうちにとて源まかるとし左遷
せば人の思ふ天下よりも須磨で九左遷は三ヶ年なり
京よりなりぬ任終て又の年の秋そ常陸へのかりなる
河　此巻は蓬生の須まなるに此間に見えたる也　花　源廿八歳
須磨の間に年ふしぬ也　弁　一位四ヶ年ふく五年
めまなるも源は須磨へ行ぬ都合三年まて右に終
へり蓬生の年下の事されとて五年まのかるへし
細　五年めまなるも見えて有り
関に向ひしも　細　常陸京に入日也　栄　常陸よりのほる
あふ坂の関まれむく日也
此度石山に詣でありしてまうでて詣なり　河　石山寺聖武
天皇御宇金鷲仙人建立之舊記曰聖武天皇御願

朗弁者先生震旦修行者也為求法向舎衛国欲渡
流沙依云切銭数月逗留天皇者先生流沙船師之不
顧切銭渡流沙修行僧既早爾時件渡修行僧為謝恩誓
之恩可生将来国王之由設誠祈誓以其合力生日本
国王也御為今生衆生済度世可立善因也朗弁奏云建
立大伽藍可為後世之資粮天皇依叡慮建立東大寺
奉鋳大仏依之為金箔自夜又息之間長伴有人奏云求
遠建立伽藍祈請為金出来者兵黄鶯今求縁地建
立観音像不経幾月下野国務為金今石山寺是也

宗 源氏物語也

うき紀のうちにひしきこともむかしおもふ人はこころ
まうて給へしをつけしまえみちの何とさとりしるき
んものゝみさてまつりし鏡よりもいつきこゝちする

紀のかみ　宗　常陸のかみの子也　空蝉のまゝ子也　宗　上洛のさき
女車おほく次せうゆるされたる日さきぬ
らくしきたるとみゆ
うちいでたる浜くるほとに　宗　大津ちかきわたりの名所也
殿はおほさかのせきやとて御前の人とたちかへりたる
もとさえ見んぬまきた　宗　粟田口乃事なるへし

行末帖
なからこえ山まもこゑまことにいさをかさねたるを行
関山まくれ給ひとおりてこゝかしこの杉乃木かけに
行
空に山まきれ行もこれゆきをゆきあかしこにまゐりける
車ともひきかへりてこゝかしこにまかせてあるもしなる
新
牛ともとかせて猿をとけるなり也　細　牛をとるなりや
車あるとかくれたるさしさえまれてあるとうしもれとける
いまはかきにしも　細　朝よりうきゆくへき程に御のかたに

上臈也 河 紛らはしきよしなれハなり也 孟 さらにへはかなし
川ノ路よりくるまもあるところも也若き里は海なるまゝ
勢田濱津并也濱へかよふ也
車ともえたるとそ袖もち物なとあひたるともまゝ出て見えし
なる 細 七日ハ車十両あまりありとも也
あ中ひとつしるして 孟 空蝉のさ局也 源氏よりまゐらす合路
八まつりに縁なかるへきにあらへし
斎宮の清くて 孟 伊勢斎宮下向事 細同
なすなとやう也物見車おほく出たるこのとかく世ハ清くは
て路ふめつらしきにあはれもなき比清せんとも 細 加茂乃祭ま
とかくうとこえつ加茂の祭なるときにハてのほか物見車なるや
うに車とものおほさんも加茂祭乃清なるとも又ハ清祓
ともいふ同しみ也へし

されめくめるなるへし 孟 常陸なとの女車ともに源氏の御
体なれめまとはしく見るに源氏なとといふ
九月はしまやするれハ猶茶なれるとしもほくてなきの
菓子くたくしう見えしやるたにせさやまりさしとくまて
にたる様もとるなともの 細 源の云系数よ後にそくうして
まうねたるや 孟 源氏乃清くより装束て出るる也
もとくれなゐとのはさくしきぬか物くるそかれなきも
花 褶襖ハぬい物ともとるものめまとをもなるや又織物を
も用るなる也一なりまひとものかとうめさ唐衣とあり
私 くるとろめ也ハなしくくらて染るる也扇なとの染物
のんするや 細 褶襖也みもて布まてらくきぬや也若きハ
ぬい物なとことも出るや又くるとそかしなるも何る面
肘もてあるよとて若きするは代わるとのうしきを見たるか

ふるめや　宗　指襖とてうるさきぬとあるまし　指の体来
や　河浴涼（こりソメ）
ちるさしにおもしろかる　宗　指姿まてあらしにゆるかるや
御車八ちるれおろし給て　細　指人のおほさ故ならう
路うしや乃るて八車ねちるれさしあるるかあぬまお
るちるかかあ文物也　宗　源氏の御車也
彼昔乃こえん人比ハ大悪のまともなるとめしよをて
花　ひ人ちと思さちまさうちて今の分ろ也　細同　宗　空蝉乃
おもう心や
あかの御かせれむるん八それといひもて給ひしるとの給ふ法人の
文ちうとあちれまおほしいつるまおほるれと　細　空蝉の
ろんへ源乃空待し給也随ふとるの実むる人てい出給ふに
いひきすし給へる臣へありぬして唐人あるとの送迎さそん

実を路く給也　宗　空蝉の開れんまは源氏の御おも
はるやうにき悪のまもとしてうたるんや客をと送
迎ま四方の開を路とまとろまを実送とかひむるひ
まゆくを実むくと云也おき悪のまもを法使のうし
空蝉すや羽衣へ
おほそかかくるひるまし　宗　おもうろに被給とのへ也
女とも人も悪心むしのかる送給えとかへいして物おか
かれや　宗　空蝉とんのうちうの中をれ宿の昔乃へと
と昔給給ま文とらうもしあそれあるとも
宗　ゆくらくやまやれとあるを源とや給ぬ清めと人つとろなるん
空蝉のあやも給ひとう空蝉くろるは源氏の御るるや
あらうとるのせさとあらうされ源とかへぬすいをきぬ信
あとかんるんともあつさられるまかれも清めおり

たゞ人のまうづるなるべし　細　清水まうでなどもあるべきことか
かやうの事にや
えしもあらじと思ひはなちたまひなん　細　空蝉の心
中に思ふ所あれなるべし　宗　むかしも今もたゞ人とも後撰
ある中にも此源氏は心ある事なりしとぞ
石山より御かへりなどもはてゝ又
遠江のかみもまかりのぼると　細　参籠と見えたり
源氏より御文なども有べきにやと　細　小君也遣はしたるも
宗　源氏は下向にしたがひけるのちけふ京にまかり給ふべきならば御むかへ
参るべきよし
一日まかりくだりしにまかりあへりしやうにこゝろへたる
やむことなき御ありさまもなつかしうおぼえ
とぶらひまゐりて又たかくれになりにしを　花　源氏は石山
に七日参籠し給へるや　一日と云詞心へかたかるべき

きや　拝　源氏石山へ御願はたしにまうでし　細　是まで皆
詞也　時はふかく思しわすれたまはぬことにやと也
旅日ごろあはれとおもひしらるゝも　宗　一夜逢坂の関にて石山に
とぶらふ事も一日とかゝるにや　旅日ごろ侍りて石山に
参りたまへる事にありけるとぞ日比なりにしにも参りたまふなり
おぼしめしけるさまも此のうちにもてなさせ給ひてたまはせ
たちかへりなどしたるとぞ　細　逢坂の関は　宗　右近の詞
也源氏の御使やさしむけられけるも世にきこえたる
あはれも常陸の下てまかりのぼるは也
もてなしたまへるを思ひしられけるは
いかにぞ思ひしれやうにとおもふにこそ侍りつれ
きゝたまへのうちみえたまへるなり　宗　右近の思ひのほどまで待
やがて源氏御心さまにてやまぬこと也まつ

出給ふぬとや
きのふもいひしをいまきかうちみるにそなりにあり
細 中川乃家あるしや
られ給ふ所の右をのせうとおもてはへるよにくるまはうしと
そらうそまて 弄 いつの手まとろやはてきへくそらしや
細 大将のうちとれ随身せしんやもまへお随ましや此
人を一階抽賞してきまほしや罰をハあさくし給や
栄 解やこんや此なかを愚ハ侍あるまじく紀伊守を招とう
とやはきはとましてトしんや素性我給の事つ
くき情しんやはかてきをつましう後京の時我のと
とくに官まありつる所やとおもて其辞を給
人を同ん数へし官をはくるらんや
なりいて給ふれもそまいそ宮されとさひしうて

栄 源氏のみある無法自體で庭あるらんや
あまくてもうらしも世ふまもりかへとゆひるんなるとさひ
出る事 栄 朱雀院乃法代に志あるみまかしきとのは
恨梅乃んや
ちくきみしうきて 栄 名馬の侍をえ山そことは下向して
やしうもなり
はせうるこあうも 栄 源氏より皇蜂へ法文遣りける後
とハおほしまるへきてとどろきあらくもおもひうるかれとさひ
やうちも 細 涼つのもまれもや皇蜂をよくきま給うさ
ゐるもしや 栄 玄清の法んや源の法心あるくおろすなるや
一日あきらきなとちんしまいとさくは月しきりんや
細 文の詞行あひ給ハ源さ其あるみとや 栄 源氏乃
文云や日なにて相なれのあり給ふまて行あひ給ハ

打もぬ契乃ちゝまつしとや此日のくれまつると一日と
くれまつ白き云けさや
よくへにゆき給ふもちをと物をはらひまうしや塩やくぬ海
細 かくさせたもあひ給ふとあふことのおもひやもあるを
によらをあり志きなくぬ海ハみるめなきと云也
宋 源氏の方ちくらきを遊やのおもひかけそ
江海を急てくらひゆきハはひあれとなるめつきなるよ
よりて塩やくぬ海といひて湖水の方なるへし
志かのうら海とさけなやてうくらに　見之
見るなくしてをし乃絶ぬらん
閑 ありしぬさもうしやまつうめさまつしうもしたとあり
細 常陸分殿物うして具して下居せしといふ
宋 常陸前司なるやおもひ坂まて急給ふにめしたるか
さきてしハ我にてきれとも見も文云也

弄 常陸守まゐりけるに関ふきといへり
此関の所のさしきちなくしくなりにたれとも今はゆ
あるくなくとの人ちちまるあひましまさん 宋 源氏石
山へ給ふ彼給の常陸祠也久しく絶くらなくしを
逢坂関心の内にともけるなるとや 弄 見より源祠也
さにくしらいとふくま逢んやとて経へ詣しけむかし
あるくてまていきなり 宋 源氏乃御かゝる色のやうやまま
ぬとて空蝉乃きまんとやいひしを云詞まて若
さとらつきこれうちらきぬんとりんをたり
あきともの給へ 細 小君は源氏の随身なぬ坂まかく思
ひなるや 宋 右衛門佐のあそれは空蝉の清女なるや
経へと云ん也
昔みえきこうしおほしのくるにはれんと云うは給なるにおなま

しゆうなる清んのまへつゝしきたらん 細 さきほとのとい
かくこそ定家の説しかとこそや 宗 源氏の用心もし
給ふぬとのへや又ハさうひ与給ぬんゆるも見るへし 同
んや小君か源氏に清借せぬ夜ゆかくこそり
いとくはりかひてさひるゝそ 宗 さまてハ源氏の清む
とをあつ待りはあなてまつる紀奴へし
ようかへこよくおもへとこそもくえのたまひへさね
宗 今ノ桜乃ことなき用れへしとこそも源氏へハさや
うみはえ申さぬとや
女まてハまきせちらしつまんとはとゆるさまぬへしるとい
細 女の分まてハはくまよろしつゝぬとや 宗 空蝉の清
色乃中縁りんま罪らはてあつまりしきとやまきとよ
とい情と申きとの事也

い庵ハましていときつるしき事乃こと 細 空蝉の心や
うねくしきこころもちあれと 宗 雅意のつゝてしとまのや
うあれなうねくしきとや
めつらしきはやうえ思されけるらん 細 帚木地や
何の坂乃せきやいつれるせ紀ちあれハ敢さあけきあれ伴ひとかくも
細 関の名乗也 紫より源と空蝉との中ハめ氏とや
宗 空蝉乃きのやあはさくハ何となる空なれせし源氏の
もあま返なまて歌をとせまるゝこやまよその称て
あつ空ハいつるやあふ坂の桜乃蔭さま陰をも歌
とるもちしてよめる奴へし
夢のやうにちすんせし世のしたり 宗 又云ちかへし
何られも清しきも是あかしとおほしとのれさる人なれ
おやしくハ女きとの給ひ 細 源の心中也 宗 空蝉乃まと

源氏とかくしては忍ひぬるよその御心也
うこうしきりとう仰侍とはあらしられたまひろはまり
うやまひまくしのこして物の侍そうろきれハなるとおに
うこうし　宗　さてかくに常陸ならの事也
たゝこれ源氏の侍るをのこ心ひとつをさてつる所乃るすこさ
此源心よのこまうきて存つる世は物うくて侍るうき内建
空の御おもひあり　細　空蝉の事也物の上世は物うう
さる年をかみとも也　宗　空蝉乃る事を常陸なりしことを
に建給へる泪淑へし
女是心うきをもくせ侍りて人には侍へとく遠て以かれる
此度はまたかれさくとくへきかりあらんと思ふけき給をとこる
に　宗　空蝉の心也常陸なる事うたる老人は似合ぬ妻
とあるもうち世乃をもくせなるに文をれのきへぬとくれ

てかくれるなまけみちあゝをもとおちんとのん也
命ありさまとある物ありれハ打しとのむへきへるすゝ
宗　常陸なるらん也
いくてう此人乃侍うきとめみのうちとく物世ひかれりけ
そのもんをもとしぬとこしろめあらうあしきことにひ
思へとも心うえとくめ女物まてうきぬ
花散里　これらさとめにのこ此命をえてしあまてもこういあうらへく
抄　了あ花は同紀来のあうてもあ人へきうれ
古さうしてその侍ひし物とあると情はくれとう心へしそ
侍れてしきおもと物ほうらも　細　いうまも子の今めかし継母
なる者也　宗　子ともうきなをと空蝉のとつかんやうりくは情
あるうしとほうる也
とあるとく侍も　宗　子ともの侍さを世中の理とも也

せのことりするれハ身ひとつ乃うきをのみなくなけきはかしく
らむ　次　継母の心也
たくこの河内ちるそもくしうきもえんあつてもろくし情う
すき御ら侍られは　細　中川のあるしや萱ちうとくつまうきし故
まんをとえらふや　宗　空蝉はむきさんなれハことも情ある
やや
の跡ひとつきし殺なしもとことおほしうとまての跡りを
よるとはいそうしよるとて　宗　河内ちるう汚きや畢下此心也
いと浅ましきんの見んしくれハうたちくせある身のかく
いきとまつちてえてしハめつしきるうとももを思のそうる
紀と人なま道ほとひしつちて　宗　河内の好文乃こころとえん
もくなとや
人のさるんとも為くせて尼になりにたるを侍る　宗　河内ちる

ふとも為くせぬとや
ひとくちうちひそめしとそひなけく　宗　空蝉は何ゆへ人を見
事や
くちをしとはくうとの事は我は思つはしたに　細　河内ちるや
宗　我好色の心をそひ跡得は今なく家へきこゆるをとも
いとほしかうに尼は好好かせ河内ちるか服方てる詞也
思ふり後ハ我を侍身のうをえるまうしきなれと
いうてる世をハもとくし跡へきとや
跡りの侍らハひハ御はく物し跡つくんいそてくもくし跡へ
きさるところ　細　跡生をハいうくや也
おひなれは心しらやるとそ侍める　細　萱生のせや
次　あちきなのちると云心也河内ちるくさくしらをと空蝉乃
心は侍ちきさるそとそふなりや　河　進恐(サカシラ)　日本紀

古
さくまつに夏なくまて藤袴のさゆく雲路と我ひとりぬる

六條
秋乃野に行てみるへき花乃色をたつさへらにおてきらん